

農業に定年はない だから自分で作った

68歳で廃業と決めていたそう。

このアジサイを出荷したら終わり。「母の日」に合わせて出荷できるよう、育成を調整している。寒暖の変化による調整には神経をつかう。すでに出荷先が決まっており、結構なプレッシャーだそう。

昭和42年。親の代から「花き」を始めた。農地もハウスも、今は最盛期の半分以下になった。廃業するので、かなり減らしてきた。今ある花は、このハウスに14種類、別のハウスに11種類だけ。

為替変動、軍事侵攻などの社会情勢により、燃料価格や電気代、資材価格が高騰し、経営に打撃を与えている。経費が急増しているが、商品に価格転嫁できない。花きは贅沢品の扱いになり、景気が悪くなると売れなくなる。価格を上げるところか、据え置きか下げざるを得ない。

このほか、パテント料※1を支払う。品種によってマチマチだが、一鉢100円くらい。自分で改良して新品種をつくることも可能だが、収益が上がるような市場での価格形成は難しい。

一鉢1000円で売れたとしても、経費を差し引くと、たいした収益にならない。

ハウスや設備も老朽化で建て直しが必要。だが、その費用がない。追い打ちをかけるように、名古屋市内と郊外を結ぶ道路が農地を分断するように計画されている。

「国は農業振興でいろんな施策を行うが、実際に安定的な経営を維持継続することが困難になってきている。」(生産者談)

持続可能な経営が成り立つか分からないので、ご子息には継がないようにと言ってきたそう。廃業後はどうするのですかと問いに、「休みたい」と答えが返ってきた。



(※1)パテント

品種開発に関わる知的財産権の1つ。種苗法に基づき、新たな品種を開発した者(育成者)が、開発された新品種を農林水産省に登録することで得られる権利。登録された品種の種苗を育成者の許諾なく、業として利用(増殖、譲渡、輸出入など)する行為は禁止されている。



(注)取材させていただいたほ場では、一般の方の見学などは行っていない。



撮影場所: 緑区大清水
撮影取材日: 2023年4月24日